

2020年度 こどもの木かげ・玉成幼稚園 自己評価・学校関係者評価

《こどもの木かげ・玉成幼稚園の自己評価》

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かげ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』(マタイによる福音書5章第13節—14節)

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。

こどもの木かげ(玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園)では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■玉成幼稚園 保育方針

個の生活と集団での生活がバランスよく営まれるように配慮しながら、友だちや周りの人たちに受け入れられていることを意識し、お友だちとの相互交渉を通じて「ともに生きる喜び」を身につけられるように育てていきます。

保育は、「子どもの心に絵を描かせる」時間と場所の提供であり、子どもの傍らには子どもを励ます保育者がいて、イメージや想像力をたっぷりと与えてあげられる保育の時間と、子どもが自分であそび、自分で学ぶことができるように工夫された保育の流れをつくっていきます。

こんな子どもに育ててほしい・・・アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求ししながら人とのかかわりをおして生きる喜びや自己実現が達成」できるように
- ②「一人一人が違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かなになれるように
- ③あそびをおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように

2. 活動状況と自己評価

【基本事項】(こどもの木かげ共通)

◆子どもたちが、自らの力でとりくむ姿勢が育ち、友だちとのかかわりを高め、育ち合っているか

子どもの興味・関心を伸ばせるよう、また、あそびや活動にじっくりと取りくめる時間・場所・物(教材・遊具等)を保障することでとりくむ姿勢を深め、育めるように努めてきた。園生活では、自分一人ではなく常に周囲に友だちがいること、一緒に活動やあそぶことで人とのやり取りを学び、相手を尊重すること受け入れること、また、自分の思いを伝え互いに共有することを学ぶ場となっている

◆子どもたちに豊かな感性が育つようなとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

園庭の花の色、空の色、季節の変化に伴う空気の冷たさ等から「感じる力」や絵本の物語や友だちと過ごすことで感じる「感情」など子どもが園で過ごすことで体験していく全てによって感受性が豊かになるよう努めてきた。また、子どものあそびで使用する教材(クレヨンや絵の具)や砂場、泥んこなど、子ども自らが取りくめるよう、環境を整えてきた。

【昨年度、今後取り組む課題とした内容】

- ・園の基本理念・保育方針に基づく保育が実践できるように内部研修を継続的にこなす。
- ・それぞれの職員の経験が生かされ、生き生きと働く職場づくりをすすめていく。
- ・「造形活動」「描画活動」の実践研究・報告を行い、子どもたちの取りくみを分析・評価をして保育の質を高めていく。
- ・保護者に対して、懇談会、個人面談、保育参観を通して子ども達の成長過程や園の考え方等を伝えていく。
- ・ケースカンファレンスを継続しておこない、担任一人で子どもの援助を考えていくのではなく、かかわることが大切なのかを協議する。

【重点的に取り組む事項】

◆内部研修を強化し、継続的にこなす

- ・研修体系・研修内容の見直しをおこない、質の高い保育を目指していく
- ・職員全員での定期的な研修と経験年数別研修を実施し、一人ひとりのもっている力を発揮できるようなディスカッション形式の場を多く職員の意欲をたかめていく

前半は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために休園や分散登園となり、研修の時間をもつことができなかった。しかし、感染拡大防止のための消毒の仕方を時間をかけて学び、実施後の見直しを丁寧におこない、徹底した消毒の仕方を行うことにつながることができた。また、後半では、始めてオンラインによる研修に参加し、全員で同じ研修を受けたことにより職員で共通理解をすることができたが、それぞれのまとめと同時に、ディスカッションができれば、より有効な研修となったと思われる。

◆職位に応じた仕事の遂行を徹底する

- それぞれの役割を理解し、各自の力を発揮していく
- 経験に応じた仕事や一人ひとりが得意としている分野を多いに生かしていく
- 決まったやり方ではなく、新しい方法も取り入れ、業務の効率化を図っていく

- 職員一人ひとりが力を発揮し業務を遂行してきた。特に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、年度当初の2ヶ月間の休園期間中に園児・保護者へのビデオメッセージ等の作成を行った。また、行事を進めていく際には、それぞれの持っている力を生かし協力して進めていくことができた。
- 行事や園の運営等をリーダー会議で進めてきたが、そのことがリーダーの負担になることもあった。内容によっては職員全員で相談して共通理解をしてすすめていくことも大切である。

◆保育内容の充実を図り、職員間で情報交換をしていく

- 表現活動に関する「描画・造形活動」「音楽表現」「身体運動」などが、より充実していく援助を考え、実践していく
- 全体会議で保育計画や子どもたちの活動の姿などを情報交換し、計画と実践の振り返りをおこない、子どものあそびや活動を就実させていく。

- 「音楽表現」と「身体運動」については、学年で話し合い、ねらいや援助等を考え実践してきたが、内容や結果を全体会議で話し合ったり情報交換や共通理解をして記録しておくことが不足していた。
- クレヨンについて理解できていないと感ずることがあった。特に、限られた色（3色および8色）の意味に改めて疑問を感じたり、「描画・造形活動」を3年間の保育として考えていくことが課題である。
- 4月5月の2ヶ月が休園だったことは、積み重ねの経験不足として特に年長児への影響は大きかった。積み重ねが足りなかったにもかかわらず例年同様の保育計画を進めたことは、反省点でもある。
- 他の学年の保育目的、ねらいを全職員で共通理解ができる場が必要である。

3. 今後の課題、取り組んでいきたいこと

1. 保育の学びを深め、保育の質の向上に努め、実践していく

- 玉成幼稚園の教育課程を作成し、幼稚園教育要領と園の保育方針を常に念頭に保育計画（年間・月・週・日）を立てるようにしていく。計画（plan）実施（Do）評価（check）改善（Action）について確認をして作成する
- 保育計画や子どもたちの活動の姿などを情報交換し、保育の向上に努める
- 職員全員での定期的な研修と学年を超えた小グループでディスカッション形式の場を多くもち保育への意欲を高め学びを深める

2. 良好なコミュニケーションと意欲をもてる職場づくりを進める（同僚性）

- 互いの個性を尊重し認め合い、職位に捉われず意見を出し合える職場を目指す
- 職位や担当部署に捉われず、保育者同士が互いに支え合って保育や業務を遂行していく
- 保育内容や行事の内容の目的とねらいを、再確認（再検討）しながらすすめていく
- 今までの決まったやり方ではなく、新しい方法も取り入れ、業務の効率化を図っていく

【運営委員（学校関係者評価）の評価】

1

2020年度は、コロナ禍により6月から開園したが、感染症対応やイベントの制限など、例年とは異なる運営を余儀なくされたため、これまでの運営との直接比較はできないと思われる。
そのような状況において、一人ひとりの個性を大切にとの視点を持ち、自由な発想を重視し、どんな子どもに対しても否定的な評価をしていないことは、先生方が長年培った保育への姿勢があったからこそ、困難な状況においても揺るがなかったものと推察する。
コロナ禍で明らかになったように、個々の努力には限界があるため、教職員間の連携を図り、教職員同士が高め合い、新人教職員が育つ環境づくりを期待する。

2 今後のとりくみ

今後も「遊びの重要性」を問い直し、学びに向かう力が育めるような魅力ある遊び環境を問い続けてほしい。
他の学年の保育目的やねらいを、全教職員で共有する必要性が挙げられているが、全体会議で保育計画や子どもたちの活動の姿などを情報交換し、理念を理解したうえで、計画と実践の繰返しにより、子どもの遊びや活動を充実させていくことが望ましい。
研修についても、園内研修のみにとらわれず新たな形式の研修を試したり、公式の会議以外に、日常の何気ない連携や協働も効果的と思われる。

3 総合所見

コロナ禍は今後も暫く続くと思われることから、2020年度の運営で学んだことを活かし、元には戻れないものは、より良いものに変化させていくべきと考える。
自己評価からは、どの先生方も、コロナを理由に泣き言を漏らさず、覚悟をもって子どもたちの育ちに向き合ってきたことが伝わった。
課題として上がっている教育課程の作成は、園の保育理念、保育方針、目指す子ども像などを総合的に把握し、より良い園運営を行うための基本的な作業であり、完成を期待する。
なお、新しい「自己評価（園評価）チェックシート（案）」については、承認する。